



第44号
発行日 1月13日
発行所 真徳山 天林寺
発行者 伊藤文元
〒430-0905
静岡県浜松市中区下池川町27-1
TEL (053) 471-6226
FAX (053) 471-6234

運命を受け入れる



天林寺住職

伊藤文元

新年のご挨拶

令和三年、辛丑(せうしゆ)仏忌二五八七年、西暦二〇二一年の新年に当たり、檀信徒の皆様方のご健康とご多幸を心より祈念申し上げます。

新型コロナ禍の今

昨年一月五日、中国湖北省武漢において原因不明の肺炎が発生しました。瞬(またた)く間に世界中に菌は拡散し日本も例外ではありません。新型コロナウイルスです。当初は大型観光船ダイヤモンドプリンセス号での様子が主にニュースとして取り扱われていました。

その後、あっという間に日本全国に感染し未だに衰える気配

はありません。かえって蔓延してきます。重症化するのはお年寄りと基礎疾患のある人と言われています。気がついたら私も喜寿を迎える歳になろうとしていますので重症化の筆頭候補者です。男性の平均寿命から思うと後四、五年は生きられるのかもしれない。しかし何時どうなるかは不明です。諸行無常の言葉通りです。

このような時私たちは不安に陥りますがどのような不安があるか考えてみましょう。

- 一、自己が無くなってしまうことへの恐怖で、これは生命
- 二、死ぬときの苦痛への恐怖。
- 三、自分の人生への未練。

- 四、家族や仕事への心配。
- 五、病気の苦しみのあまり、早く楽になりたいと云う願望。
- 六、家族の同情が欲しいことから関心を引くために「死にたい」などと云うこともあります。

七、死病ではないかと疑う気持ちもありながら、自分の病気がはっきりしないようなときには、家族や医者が結束して嘘を云っているのではないかと不信感に陥つたりします。

八、苦痛のあまり、自分の事だけで精一杯になって我が侷になり、医師は何時でも来てくれる、何でも聞いてくれると錯覚します。それが満たされないと不信感を持つようになります。

こう言う不安と恐怖を乗り越えるためにはどうしたらよいのでしょうか。

受け入れがたい死

病人が死を受け入れるためには幾つかの段階を通過して行くことが解っています。

あるお檀家さんの十八歳になる息子さん単車で事故を起こして入院。毎日お見舞いに行かれましたが亡くなるまでのこの変化には四段階あったそう

です。

最初は死にたくないを取り乱して喚(こゑ)いていました。それは、死の恐怖と不安の虜(こゝろ)になっている段階です。次に、何日か経って落ち着いて来たなら何故死ななければならぬんだ、と答えを求めようとする段階です。更に何日かたつとどうにでもなれと捨て鉢(はち)になり僻(ひが)み、まわりの人の愛情を拒否する段階です。


そんな事が幾日か続いてから、家族や病院関係者の努力や愛情が解って来て、お礼を云うようになったそうです。

四段階を通して自分の運命を受け入れられるようになったわけです。

このように最後の段階まで到着出来た人は運命を受け入れ、死の不安や恐怖を乗り越えられる訳です。

道元禅師は正法眼蔵「生死の巻」で次のように述べておられます。

この生死は即ち仏の御命なり。これをいとい捨てんとすれば、即ち仏の御命を失わんとするなり。これにとどまりて、生死に著すれば、これも仏の御命を失うなり。仏のありさまをとどむるなり、いとうことなく、したふことなき、このときはじめて仏のこころにいる。


ぴーぴーおばさん

天林寺寺族 伊藤 諦子

私には忘れ得ぬ人生の恩人がひとり。血筋でも親類でもない赤の他人。その人に出会わなければ今の私はないと言える。私の人生を支えてくれた名言の主でもある。その名は「ぴーぴーおばさん」本名は吉沢千代さん。おかげ顔にいつも笑顔たたえおしゃべりしていて賛成だと「そうく、く、く」とにっこりしながら連発するのが常だった。背が高くご主人は低く、いわゆる「のみの夫婦」。当時お子さんがなく私の弟が生まれた時からかわいがりいつも口をすぼめて「ぴーぴー」と鳴らし弟を喜ばせていたのでぴーぴーおばさんになった。おばさんはご主人を江戸っ子らしく「あんた」と呼んでいた。ぴーぴーあんだ夫婦。それがいつの間にか固有名詞になって子供の私達から近所の人まで呼ぶようになったのです。下町風で笑えますね。

ぴーぴーおばさんの実家は池上。本門寺のある東京の下町でよく遊びに連れて行っていただきました。ぴーぴーの母親は信仰深い方で「人の未来を占う」民間の徳人で眼光鋭く子供心にちよっぴり怖い方でありました。多感な高校二年の時私の父母

が離婚して、すぐに後妻がやって来ました。兄は大学生、弟はまだ小学五年生。無口な男の兄と弟と義母の間に立ってのクツション役がまだ少女だった私で右往左往している時のぴーぴーおばさんの名言は心に深く残りました。「諦ちゃん、今の貴女の不幸はあなたのものじゃあないの、親のものなのよ。嘆くことなんかないの。あなたの人生はこれから。諦ちゃん次第。いくらでも素晴らしい人生を築くことが出来るわよ。あなたの心ひとつよ。明るく生きるのよ、忘れないでね」と。みるく曇天が青空に晴れ渡って行った瞬間だった。古今東西数々の名言はあるが私はこのぴーぴーおばさんのやさしい力強い言葉で苦しい時を乗り越えることが出来たのです。忘れ得ぬ人生の恩人です。

ぴーぴーの晩年、入院中会いに行くことが出来なかったので毎週自作の励まし絵はがきを出し続けました。ご逝去の後ぴーぴーおばさんの「諦ちゃんに贈ってね」との遺言でお嬢さんが備前の藤原雄の立派な壺を届けて下さいました。その壺は今不老閣に飾ってあります。いつもぴーぴーおばさんに見守られて私は寺の務めをさせていたでているのです。感謝くぐでございます。

台草


本山修行ご報告
三年目の重く貴重な体験

天林寺徒弟 長谷川敏正

永平寺での修行生活も三年目に入りました。段々と、教えてもらう立場から、教える立場に変わっていききました。二年目の終り頃から三年目の始め頃は後単行寮という、後堂老師と単頭老師のお世話をさせて頂く寮舎に居たことは前回お話ししました。

その後、祠堂殿という寮舎に、今度は「寮長」という立場でまたお世話になりました。「寮長」と言いますのは、寮舎の修行僧を束ね、寮舎をスムーズに運営・管理する役目の修行僧のことを言います。当然、修行僧としてある程度の知識や経験を有することが必要となりますし、同じ修行僧でするので模範となることも求められます。祠堂殿という寮舎は、一般のお参りに来られた方々の法要を行いますので、一日三、四件ほどある法要で、それぞれ配役を決めたり、気がついたことがあれば各修行僧に伝え、個人、または法要そのもののレベルアップを図っていきま

す。また、修行生活に悩んでいた

りする子がいたら相談にのったり、調子に乗っている子がいたら手綱をひいたり、寮舎がよい雰囲気で行行に励められるように気を遣ったりしました。

三年目の後半は、傘松会という寮舎に寮長として転役しました。こちらは、毎月発行の永平寺の機関誌や、年末発行のポストター等を製作している寮舎になります。仕事は寮長でない時とそれ程は変わりませんが、新たに寮舎の発行物の販売代金を管理して、経理と指導教官の「役寮」さんに報告する、といったものが増えました。また、傘松会でも、とりまとめ役とパイプ役という役割を担いました。特に、永平寺一年目の修行僧とは積極的に話をするように意識して、お互いが楽しく学び、楽しく成長できるように努めました。

拙僧は四〇歳で永平寺に上山しました。二〇代半ばの修行僧仲間よりも、指導教官の役寮さんの方が年齢が近いこともありました。従って、修行僧と役寮さんとのパイプ役はやりやすかった面もあったと思います。良い経験をさせて頂きました。

台草

編注

後堂Ⅱ修行僧の最高指導責任者、単頭Ⅱ後堂の次位の指導者。



Q どうするコロナ禍の不安？

人々の心をも脅かし、暮らしまで規制、時流をも変えようとしている新型コロナウイルス。目に見えぬゆえに不安、不自由で落ち着かぬ日々が続きます。オリンピックをはじめ各催事は

延期や中止とし備えたものの、感染は二波三波と拡大、収まるどころを知らずさらに人々の不安は募ります。

一方、対応する当局は経済と医療を天秤にかけるような施策で勧告、指導・規制、と場当たり的で一貫性に欠け、落ち着かない。また、国と地方の協調は今ひとつであり熱意は伝わるが効果は今ひとつ。昨今では国家のカジ取り：政府までもがその方策に苦慮しているようだ。

しかし、禍、災難はいつの時代にもあり、その都度、人々は乗り越えてきている。かの奈良東大寺の大仏は聖武天皇が早害や悪疫の沈静を願っての造営であったり、約百年前のスペイン風邪では世界人口（当時は約十八億

人）の三分の一から半数が感染、三〜五%が死亡、日本だけでも三九万人が亡くなったと伝わる。古人はどう考え、対処したのでしょうか？

皆さんよくご存じの良寛さん（一七五八〜一八三二年）は

災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。死ぬる時節には死ぬがよく候。これはこれ災難をのがるる妙法にて候。

（災難に逢ったときは逃げずに直面した方がよい。死ぬときは死ぬ覚悟をする方がよい。これが災難という苦難から逃れる妙法です）

と、友人から届いた地震の見舞状の返信で述べている。つまり「災難や死からは逃れられない。あるがままに受入れ、腹を据えて精一杯に生きよう」と覚悟を決めて直面し、素直に受け入れる心構えを説いている。

一般に伝わる良寛さんは、越後（新潟県）生まれの詩と書道に長けたお坊さんで、托鉢の途中でも時を忘れて子供たちと遊んでしまう：優しい人、のイメージが強いが、「成り行きのままに任せきり一切の意図的な働きを捨てた生き方であり、自らの人

生観を示す（岩波仏教辞典）」として紹介もされている。庄屋の家に生まれながら世の無常を感じたのか出家。師の下、倉敷の円通寺にて道元禅師の「正法眼蔵」を初見、大いに感動するも印可後は、寺も持たず禅も語らず諸国を行脚、放浪した。清貧の生涯を送った僧の無心の境地であるうが、その根底には、書物を通じて尊崇した道元への想いが強く中でも「永平録を読む」では「一夜灯前、涙、留まらず」と感動を隠さずに伝えている。

一方、宗祖道元禅師（一一〇〇〜一二五三年）は、正法眼蔵の初め、在家信者の為に書かれたという「現成公案」の巻で「現実の世界の中で、あるがまま生きていくことの大切さ」を説いている。

悟りは求めていくものではなく、悟りの方から自分を目覚めさせてくれる、と自らの体験から発想された言であるうか。

コロナ禍の今、拡散予防への自らの姿勢が収束への一石であり、人としての務めであること、を自覚して臨みたい。長い歴史を重ねた人間社会は自粛の中でもそれぞれの工夫と創意をもってコロナと闘っている。そして、そこから生まれる知恵は貴重であり、貴い。

仏教由来のことは

我慢（がまん）

新型コロナ騒ぎで全世界が我慢を強いられている。日本でも三密を避けた行動基準が示され窮屈な日々が続く。

「我慢」は、ほぼ「辛抱・耐え忍ぶ」の意味で、ほとんどの人が幼いころに諭され、親となつては児を躾てきた。TVで、「：じつと我慢の子であった」が流行語になったり、職場で「我慢、我慢だよ」と慰め気味に使われたりして一般的には良い意味の言葉である。

ところが、元来は好ましい意味の言葉ではなく、煩惱の一つで、強い自我意識から起きる「慢心」のことをさす。自分を過信して他を軽視する思いがりの心「慢」をはじめ、過慢、慢過慢、我慢、増上慢、卑慢、邪慢を七慢と言い「我慢」は、我は：とか、私のもの：、と執着しおごり高ぶることの意味で、強く戒められてきた。

しかし、時を経て、我が強いことから負けん気が強い：になり、頑張りがきく、忍耐する：と次第に良い意味となった。

落語の世界では「強情灸」が強情と我慢は縁続き、と笑わせる。

報告いたします

山門施食会(孟蘭盆会) 七月十五日
コロナ禍の法要準備

世界的な新型コロナウイルス感染拡大により、政府は緊急事態宣言の発令をした。

そして政府・専門家の間では、二次感染などの恐れもあり国民にマスクの着用や「三密」を避けた生活指針の励行を促進、国民に自粛を強く求め六月を迎えた。

当山では、本山、宗務庁、地元仏教会の対応方針を参考に檀家総代様、関係者などと協議を重ね、出来る限りの対応措置で施食会開催を決定した。



コロナ用受付窓口

新亡家(初盆のお家)の受付は玄関先。会話の飛沫防止のため、透明の遮断フェンスを三か所設け、総代さま方が若い和尚さんの手助けを受け、供物などをお預かりしているが、例年と違うのは感染予防の薄いゴム手袋(…精霊棚の水向け用)が手渡された。勿論一般参加の方にも事前に十分の消毒をしてもらう。受付を済ますと本堂に向か

う。文書でお知らせしてある一家庭二名様までのご参詣が守られソーシャルディスタンス?間隔の新亡家席で待つ。ウィークデーとあって子供の姿は見当たらず、隣席が遠いので会話も少なめ、本堂内は静かである。

導師の文元方丈が入堂。きびきびと焼香、五体投地の礼拝の後、案内の声と居並ぶ僧侶になり檀信徒も掌を合わせ、三拝。全堂挙げて法要に入る。

導師の献湯菓茶が済むと、読経。続いて、精霊棚に對面する位置に導師が移り、僧侶達も従う。「山門施食会」に移り、読経。終わると導師は檀信徒をはじめ諸精霊、大震災の犠牲者への供養を告げる。続いて経を挟み、新仏の戒名を奉読された。



心を籠め手向ける

経が続く中、新亡家のご家族から精霊棚に向う。水を手向け、ご先祖さまに祈り、それぞれの想いを胸に席に帰る。コロナ禍の中、第一回目の法要は終了した。第二回は十五時より始まる。

薄暮の中、山門前にて

十九時、方丈さまはじめ僧侶が山門前に出座、精霊送りの法

要が営まれた。時節柄、薄暮のうちから始まり夜のとぼりが降りる頃には終了した。

彼岸法要(九月十九日)

コロナ退散祈禱会も併せ営む

真夏日でもマスク必携を強いられるコロナ禍の中、彼岸が訪れた。巡る四季のありがたさ、自然界は若干のずれはあるものの、確実に季節の色をもたらし始める。

はじめにコロナ退散を祈禱

正確に殿鐘(本堂の釣り鐘)が鳴らされ和尚さま方が入堂された。本年のご詠歌は自粛され一同三拝の後、散華にて道場を清めた。散華とは、花の芳香と薫じ清められて水によって道場を清めて仏さまを請来するためである。(…年の初めの般若札祈禱の折にも行われる)

献湯菓茶を済ませ、般若心経が詠まれ大般若経の転読、と続き災難消除の陀羅尼が読誦された。世間を翻弄している新型コロナウイルスウイイルス鎮静への祈禱であり、その意を込めたお札が須弥壇に積まれていた。やがて各檀信徒へと送呈される。



彼岸会での読経風景

小鐘が鳴らされ、彼岸会のお勤めに移る。例年と変わらぬ数の檀信徒の列席があり、堂内の緊張は高まる。やがて読経の中、参会者は個々に回り香炉を受けご先祖へ供養の合掌をつなぎ続けていった。

法要が終わり、お待ちちかねの「清興の会」と続くところが今年には自粛中止となり、やむなく散会となった。



三密を避けて

案内いたします

●二月十二日(祭) 初午大祭

お茶会は屋内、楽市は屋外ですが三密を避け、今年は中止と致します。

●三月十七日(水) 春のお彼岸会

法要は十三時半から予定はしていますが、コロナ感染状況によってお寺内にてのお勤めになることもあります。

◎ご協力ください。

当山へはマスク着用、三密を避けてのお詣りを、また行事内容の変更もあり得ることをご承知おきください。